

3 群馬県における製鉄遺跡

上野国は、いうまでもなく、古墳文化を中心として、東国における主要な地域であった。その文化を支える農業生産力には、背景としての鉄器文化の存在が要素となるであろう。事実、古墳の副葬品、工具、武器、農具等に鉄製品が多量に認められる。しかしこれがすべて、本地域で生産されたとは限らないし、現状からすれば、否定的な要素が強いといえる。しかし一方現実には、県下にもいくつかの鉄滓出土地を挙げうるし、地名等からも製鉄との関連が指摘できる。こうした遺跡が、時期的にどのような位置にあり、如何なる性格を有するものかは、現段階では明確になし得ない。そこで本稿では、まず鉄滓出土地、鑛口等の製鉄のための道具を出土している遺跡の概略をのべ、次に製鉄と関連する地名とその分布について考察し、最後に、群馬県における製鉄遺跡の概観と発展について一応の見通しをのべておきたい。

群馬県における製鉄関係遺跡一覧

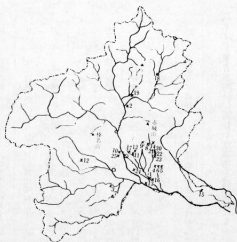
番号	遺 跡 名	所 在 地	立 地	備 考
1	木崎中校庭第3号跡	新田郡新田町木崎中校庭	緩傾斜	鉄滓、鑛口、火床、大鍛冶場八C 三十六年度考古学年報所収
2	森下遺跡	北群馬郡昭和村大字森下	平坦地	鑛口出土、鑛口、鑛口跡？ 群馬大史学研究會発掘
3	入野遺跡第11号跡	多野郡吉井町大字石神入野中校庭	平坦地	鑛口出土、七C末「入野遺跡」所収 群馬大史学研究會発掘
4	御伊勢坂遺跡	佐波郡赤堀村大字香林字御伊勢坂	平坦地	鉄滓出土、大鍛冶場八C 群馬大史学研究會発掘

番号	遺跡名	所在地	立地	備考
5	山陰遺跡	新田郡笠懸村大字鹿字山陰	傾斜地	鉄滓出土 「群馬県の遺跡」二二二〇
6	馬見岡遺跡	新田郡笠懸村大字西鹿田字馬見岡	傾斜地	鉄滓、樋口、須恵器 「群馬県の遺跡」二二二二
7	日野銅沢遺跡	藤岡市大字下日野字銅沢	傾斜地	鉄滓、たたら 近世? 群馬大史学研究室発掘
8	片並木遺跡	勢多郡宮城村大字南ヶ島字片並木	傾斜地	鉄滓、たたら、住居跡九C 昭和三十六年群馬大史学研究室発掘
9	市之岡遺跡	勢多郡宮城村大字市之岡	緩傾斜地	鉄滓 近世? 群馬大史学研究室発掘
10	大友遺跡	前橋市大友町稻荷東	平坦地	樋口、出土鉄滓
11	多田山東麓遺跡	佐波郡赤堀村大字田向井今井字	傾斜地	鉄滓、かなざ沼、鉄槌、炉壁出土
12	崇徳山遺跡	安中市大字下秋岡崇徳山	傾斜地	鉄滓、焼土
13	柴崎遺跡	高崎市柴崎町能野前	平坦地	鉄滓
14	上板橋遺跡	勢多郡新里村大字上板橋	傾斜地	鉄滓、道路断面跡
15	多々良沼北岸	邑楽郡多々良村	緩傾斜地	鉄滓

以上は、筆者が実見、若しくは遺物を確認したものであるが、その他にも宮城村苗ヶ島、前橋市女屋町、群馬郡室田町大字上里見等においても鉄滓の出土が認められたという。こうみてくると、おそらく本県における鉄滓出土は、今

25	昌楽寺裏遺跡	前橋市元総社町昌楽寺裏	平地	竈口
24	東善遺跡	前橋市西善町東善	緩傾斜地	鉄滓
23	北向野遺跡	同 字北向野四八三	緩傾斜地	西傾斜面に鉄滓
22	椋久保遺跡	同 字椋久保八一八	・	雑木林、溝、鉄滓、灰壁、水車輪か
21	鉄屋遺跡	同 字鉄屋四一五	・	灰壁、鉄滓
20	土手久保遺跡	佐波郡東村大字国定字西土手久保 二九八、三〇五	微傾斜地	鉄滓、灰壁、桑畑
19	生品遺跡	利根郡川場村大字生品	緩傾斜地	竈口
18	花咲遺跡	利根郡片品村大字花咲	傾斜地	竈口、土師器
17	上縄引遺跡	前橋市西大室町上縄引	緩傾斜地	鉄滓、灰壁出土
16	中溝遺跡	新田郡新田町中溝	平坦地	鉄滓

約二三度の傾斜で竪穴内部に挿入されている。しかも、この状態をみると、粘土で竪口を固定したらしく、竪穴内は長さ六五釐程の楕円形に粘土を張った窪地を作り、火床としている。粘土の上面は炭粉を含んだ黒色土で覆われている、その中から鉄滓が出土した。



挿図8 群馬県下における鉄滓等出土地

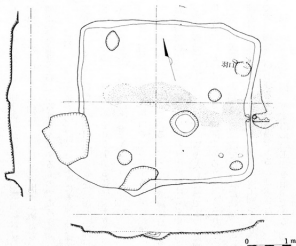
後、倍加されてくることは疑いをいれないであらう。(挿図8)

これらの中から、特に問題となりそうな遺跡のいくつかについて、多少ふれてみたいと思う。

A 木崎中学校校庭第3号遺跡

校庭敷地後、ローム面に黒色土が方形に充填したかたちで、二〇カ所あまりの住居跡を認めたが、ここに取上げた遺跡は、その集落の西端、台地の西斜面にあつて鉄滓、樋口を出土したものである。(挿図9)

遺構は、規模が東西三・九四米、南北三・七二米、深さ二五匁のほぼ方形の竪穴であるが、その東壁中央部及び竪穴中央に強力に焼けた部分があり、その周辺を中心に鉄滓が出土し、更に東北隅からは竈口が出土したものである。東壁中央部に敷設されたとと思われるこの竈口は、竪穴外部から壁面をうがって照をみると、粘土で竈口を固定したらしく、竪穴内は粘土の上面は炭粉を含んだ黒色土で覆われてお



挿図9 木崎中学校第3号遺跡

さらに、この長軸延長上の竪穴中央部には巾五〇
 ㎝、深さ二〇㎝ほどの楕円形を呈した強く焼けた粘
 土で、レンズ状の窪地の火床が作られていた。この
 部分は中央部に鉄滓が密集し、周辺にいくに従って
 焼け方も弱まる。その最も強い中央部では、粘土が
 青色に三㎝ほどの厚さで焼け固まっていた。

なお、竪穴内には、南西隅、及び南壁中央に深さ
 一米内外の大穴があげられて、中に粘土、ローム塊
 が出土した。おそらく、火床の改修に使用される粘
 土の置き場であろう。

土器は、竪穴内東半部に多くの破片が出土するが、
 坏、甕を主とした土師器、及び碗、甕を主とした須
 恵器で、この遺跡の時期の認定に資せられるものを
 多く含んでいる。

この遺跡に類似したものは、茨城県水戸市東町の
 土師竪穴¹⁶、青森県森田村八重菊竪穴住居跡¹⁷に求めら
 れることができる。

水戸市東町の遺跡は、住居の西南四半部に工房的な遺構が認められたという。即ち、住居中央で東西に仕切りを施し、その南側に粘土叩床の炕があり、その表面はげしく焼け固まりその周辺から鉄製品、鉄滓、片口付きのるつぼが出土したという。遺物は、墨書器等の出土がめだち、それは奈良末と平安初期に比定できるという。おそらく、木崎中校庭遺跡と類似する性格を有するものであろう。

さらに、青森県八重菊の遺跡は、東壁に木崎と同様に竈を挿入したと思われる溝を敷設し、しかも、その中央に直径九榧、長さ二二榧の土製竈口が、扁平な直径三一榧、短径一一榧、厚さ七榧の石と共に直立していたとのこと、しかも、この溝は壁外にややせり上がる状態であり、竈穴の内側も焼けていたという。遺物は埴形土器を出土しており、時期も平安初期頃に比定できるという。

更に、石神にも同様の竈口、炕を有する工房址が認められたという。¹⁸

以上を総合して考察してみると、この種遺跡における工程は、二段階考えられそうである。すなわち、東壁に接した部分での工程と、遺構中央部の火床における工程とである。

東壁部分での工程は、壁外から投入した竈で木炭を燃焼させ、その上に原料を載せて溶融し、鉄を下にしずませて集める、いわゆる荒吹き¹⁹の段階であろうと考えられる。

遺構中央部での工程は、前段階で得られた鉄を、さらに脱炭し、鍛造したのではないかと考えられる。すなわち、前者は「荒吹き」とよばれる第一次精錬の工程であり、後者は「却し鉄法」ともいうべき第二次精錬過程を示すもので本遺跡は、いわゆる大鍛冶場であると推論したい。

以上のように、同一竈穴内に二工程を推論できることは、中世におけるこれら二工程（荒吹き・鍛造）の作業が分業化していくことと関連させて考える時、その分化の時点を推察する示唆を与える資料として興味深い。¹⁹

さらに、本遺跡における出土土器の様相からみて八世紀に比定できるが、東国における工程分化の時期を推論する上で、茨城県水戸市の例と合せて今後検討する必要がある。

B 多田山東麓遺跡

この遺跡は赤城南麓の丘陵台地の東斜面に位置している。Tachii は Tsuruta の縮小語であるという。²⁰

しかも、この地から鉄滓が出土していることは注目に値する。更に、その五米ほど南には俗称「カナザ」といわれる池がある。この池は斜面のところをならしたような場所に、湧水が貯えられている。この「カナザ」は、おそらく「カナザワ」の転訛と考えられるが、タダ、カナザ、鉄滓の出土は、単なる偶然とは考えられない。しかも、土地の人の話では「鉄槌」も出土したというが、現在は不明である。いずれにしても、この地が古くから鉄に関連していることは、以上から明白であり、しかも、タダ、カナザ等の名称は中世的なものを感じさせることから、あるいはそうした時期のものと推定されるが、後日、機会を得て発掘してみたい。

C 東国定遺跡群

表4の二〇・二三のものであるが、これらは近接しており、しかもそれが早川の流域に沿って散在している。これらの遺跡は共通して、多量の鉄滓と灰壁を出土しており、すでに破壊されており、その鉄滓は歩止まりの悪いもので、スラッグは、相当高熱により溶融されたことがうかがわれる。特にここは雑木林にかまれたところの周囲に多量のしかも大きな鉄滓が見られ、しかも、その雑木林の中には、巾五〇釐程の溝が通っている。附近の人の話では、昭和初年まで「クルマ」といわれた精米水車がまわっていたという。この水車が、直接その鉄滓に結びつくとは断言できないが、近世における水車輪を利用した製鉄法を探っていたと推定すれば、その機能がなくなるとき、その水車を利用して精米をはじめたことも推察できるわけである。以上、鉄滓、立地、伝承、地名等からして、本遺跡は近世に

おけるものと考えられる。

以上、古代から近世にいたる製鉄関係の代表的遺跡と考えられる三つについてのべてきたが、これはあくまでも、現時点での外見上から認められることによる推論の域を出ないものである。今後、これらを発掘調査し、成分分析により、より明確に時期的な結論を得たい。

さらに、現在の地名の中に、製鉄に関すると考えられるものが多数指摘できる。その多くは「カジ」という音がそのまま残されたものが、多いが他にも、フキジ、イモジ、カナクソ、カナヤ、カナヤマ、カネコ、カンナ、ニブ、ニユ、タタラ、タダなどの多岐にわたっている。²¹

調査の精粗ということもあろうが、特に集中的にみとめられる地域は次のようである。

- (イ) 片品川流域
- (ロ) 榎名山東麓
- (ハ) 赤城山南面
- (ニ) 鍋川下流域
- (ホ) 早川流域

そこで、これらについて簡単に考察して、その立地条件を検討しておきたい。

- (イ) 片品川流域

本流域の上流地帯は母岩として花崗岩が存在している。²²いうまでもなく、砂鉄は火山岩中、ことに花崗岩中に多量に含まれており、降雨、出水のおりに土砂が流されて洗い出され、この時、比重の重い砂鉄だけが地表に表われるという。この流域に製鉄遺跡や、製鉄に関連した地名が多いのは、この点に關係しているのではあるまいか。

(四) 榛名山東麓地帯

この地域も、赤城山麓同様、ローム層の堆積が顕著な地域である。その意味からして、前に赤城南麓地帯でふれてみたように、ローム層中の砂鉄が洗い出され、それが原料として使用されたものと考えられる。

(二) 鏡川流域

特に吉井町周辺に、製鉄関係の遺跡はまだ耳にしないが、それに関連する地名は多い。この地域の地層は第三紀層であるが、上流に丹生、入野²³などの砂鉄に関連した地名がみられることから、流域でも砂鉄が得やすかったものと考えられる。更に、条件の一つとして、この地域に帰化人が多かったことも挙げられる。「韓鍛冶」なる表現は続日本紀等を中心に数多く見えるところであり、鉄製の武器や農具の製作に帰化人がたずさわったであろうことは、容易に推定できる。金井沢碑の「磯部君身鷹」なる人物こうした人々が、後に鍛冶戸や雑工戸として地方に浸透し、その技術的な伝統が受けつがれていくことは考えられることである。こうしてみると、この鏡川流域は、古式の製鉄関係の遺跡が存在することが推察されるし、事実、「入野遺跡」では、鑪口の破片と思われるものが、七世紀末と考えられる住居跡（工房跡）から発見されている。今後、この地域については、綿密な調査をしてみる必要がある。

(三) 早川流域

この流域は、北は新田郡笠懸村大字鹿字山陰²⁴、同村西鹿田字馬見岡²⁵から、下流の東村東国定へと連なる鉄滓出土遺跡が指摘される。

上流の二遺跡はともに鹿田山、天神山の南裾部傾斜地にあり、特に馬見岡遺跡は、鉄滓と共に鑪口、須恵器破片等が出土したという。これが同一遺跡から出土したとすれば、その遺跡の年代を下げて考えることはできず、比較的古いものと考えざるを得ない。

下流のものについては既に述べたので略すが、流域に古そうな遺跡と新しいと思われる遺跡が存在することは、立地、形態の研究の上から重要である。

いずれにしても、それぞれの地域は現在の人々の生活の舞台としてもすぐれた地域であり、古代からの生活が営々と続いてきていることを考えると、それぞれの時点においても製鉄が行なわれてきているであろう。今後は、こうした観点から、資料の収集をしていくことが必要であろう。

群馬県における製鉄関係の遺跡の、発掘は今手がついたばかりである。そして、発掘によりある程度時期の明確なものも指摘できた。今後も、立地、鉄滓分析、発掘による炉の確認等を通して、この種遺跡の検討を進めていかねばならない。

4 片並木遺跡の時期

片並木遺跡は、他の多くのたたらがそうであるように、時期を明確にする積極的な資料に乏しい。その幾り所となるものは、鉄滓自体の分析と、遺跡から出土した須恵器以外にない。前者については後で述べるとして、最初に、須恵器について述べよう。

須恵器は遺構中で筆者が防熱壁と推定した石組列の下から出土したものである。この石組列そのものも類例がない現在、この遺構中における施設とする根拠も弱いが、ここではすぐ北方に認められた住居跡との関連が重要である。すなわち、この住居跡が「たたら」と同一面からの掘り込みであること、及び壁近くから鉄滓が出土していること、住居跡からの出土土器も「たたら」出土のものと同時期であることから、この住居跡は少なくともある時点で「たたら」と併行して存在したと考えられ、しかも両者は関連を有していたことが推察される。

そこで、これら須恵器の時期は、いかなる年代に比定できるか考えてみよう。技法的に、特に、口唇部の整形、胎土、